



泊外人墓地 地図



〔那覇市指定文化財 泊外人墓地〕  
 ・面積：2892 m<sup>2</sup>  
 ・指定：1987〔昭和62〕年8月10日  
 ・墓碑数：386基

ペリー上陸  
記念碑

ファミリーマート



道路

墓碑銘

A

Here Lies The Body of Rev. Fr. <b>MATTHEW ADNET</b> of the Paris Foreign Mission Society Apostolic Missionary Who Died in the Ryukyns 1. July 1848	主よ 永遠の安息を 彼に与え給え
-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------

B

W M HARES  
 ENGLISHMAN  
 1816

C

WILLIAM BOARD  
 UNITED STATES  
 NAVY  
 DIED 1854

D

乾隆十五年庚午  
 清故江南蘇州府常熟縣朱三官  
 七月初八日酉時死

E

康熙五十七年  
 清故浙江寧波府定海縣  
 六月初五日卒享〇〇〇

## 資料1 中国（清）<sup>しん</sup> 水軍隊長の王拱<sup>おうきょう</sup>の場合（1718年死去）

・琉球国より中国（清）<sup>しん</sup>へ、中国人漂着者について知らせる書

康熙<sup>こうき</sup>57年（1718）9月

（あらずじ）康熙<sup>こうき</sup>56（1717）年12月1日、中国浙江省寧波定海鎮<sup>ニンポー</sup>の沿岸警備隊に所属する軍用船1隻（乗員50名）が出港、中国沿岸を航海中、20日、暴風に見舞われ、碇<sup>いかり</sup>や舵<sup>かじ</sup>を失い漂流、その間8名が行方不明、宮古島近海まで流され、沿岸の珊瑚礁<sup>さんごしょう</sup>に衝突し大破しました。翌年の康熙<sup>こうき</sup>57（1718）年1月5日、宮古島島民によって42名が救出され、4月19日沖繩本島の泊村<sup>とまり</sup>の館<sup>やかた</sup>（漂着者収容施設）に送られ、日用品や食料、衣類などが支給されました。

5月11日、漂着者一行の世話役であった毛新城<sup>もうあらぐすく</sup>より、この船の隊長である王拱<sup>おうきょう</sup>が吐血<sup>とけつ</sup>し、医者<sup>いかり</sup>の治療を希望したので、すぐに名医を派遣し、毎日医者2名をつけて看病している、との報告がありました。部下たちの証言によると、王拱は昨年6月の頃からすでに吐血<sup>とけつ</sup>病<sup>かいけつ</sup>（壊血病か？）の症状がみられ、今年5月になって再発したものらしい、ということが分かりました。

（特別に）国王の主治医を派遣してもらい、毎日、朝鮮人参<sup>かんおけ</sup>を服用するなどの治療をしましたが、その甲斐<sup>かい</sup>もむなしく、6月5日酉<sup>とり</sup>の刻（午後6時頃）死亡<sup>かんおけ</sup>しました。棺桶<sup>かんおけ</sup>や葬式<sup>そうしき</sup>に必要な品物<sup>しなもの</sup>を用意し、泊村西<sup>まいそう</sup>の松林<sup>ぼひょう</sup>の中に埋葬し、墓標<sup>ぼひょう</sup>を建てて、村民たちに管理させました。

残った兵士たち41名は、閏8月10日、中国へ帰すため、琉球の船に乗って順調に那覇港を出港、途中、渡嘉敷島に停泊していたところ、翌日急に暴風が起り、船が港の外に流され、大岩に激突、その衝撃で乗組員達は船外に放り出され、中国人乗組員4名、琉球側の通訳1名・船員1名が溺死<sup>できし</sup>しました。このたび、破損した船を修理し、生き残った37名の兵士を乗せて福建へ送り届けます。

（『歴代宝案』<sup>れきだいほうあん</sup> 第2集9巻12号）

\*その後、康熙57（1718）年12月1日帰国を果たした、と中国側より報告あり



## 資料2 中国（清） 船員朱三官の場合（1750年死去）

琉球国王尚敬より中国（清）へ、中国人漂着者を護送することを知らせる書

乾隆15年（1750）11月18日

乾隆14年（1749）11月29日、船一隻が奄美大島に漂着しました。その船主である、瞿張順らは以下のように証言しました。

「私たち13名は江南地方蘇州府の商人です。今年11月7日山東を出港しましたが、その航海中、突然、台風に遭い、流されてしまいました。18日には再び出港しましたが、思いがけなくまた暴風に会い、今度は舵を失いマストまで折れてしまいました。29日、奄美大島に漂着し、すぐに地元の役人に船を修理してもらい、米や薪、醤油、野菜、たばこなども支給してもらいました。翌年（乾隆15）2月19日、再び奄美大島を出発しましたが、またまた暴風にあい、21日には奄美諸島の喜界島に漂着しました。船は珊瑚礁に乗り上げ壊れてしまいました。私たちは岸までたどり着くことができ、助かることができました」

すぐに奄美の役人に食料を与え、保護させ、その後、瞿張順ら13名は、かき集められた船の荷物などと一緒に、今年（乾隆15）4月4日、沖縄本島山北の運天地方に送られました。さらに、漂着者をに中山の泊村（現在の那覇市）の漂着者収容施設に送り届けさせ、追加の食料や衣服などの生活用品を与えさせました。

泊村の役人、毛内間らの報告によると、

漂着者のうち、船乗りの朱三官は、今年2月喜界島で吐血病を発病しており、病状がなかなか回復せず、医者の治療を希望しましたので、早速、医者1名を派遣し、毎日診察して治療しましたが、5、6ヶ月経過しても、病は益々重くなるばかりでした。医者は心を尽くして朝鮮人参等の漢方薬も用いましたが、病状は重く、7月8日の酉の刻（午後6時頃）に死亡しました。すぐに、棺桶や葬式に必要な品物を手配し、泊村西浜の松林の中に埋葬し、土を盛って、墓標を建て、村民に管理させました。

（『歴代宝案』第2集31卷29号）



### 資料3 『はくせい かんわ百姓官話』\* に登場する朱三官との会話

\* 18世紀後半以降、琉球の通訳（通事）たちが使用していた中国語学習のためのテキスト

通事：鄭さん



朱三官の病気は今どういう具合ですか。

中国人漂着者 A

よくありません。ますますひどくなっています。



彼はどこに住んでいますか。私は行って彼を見舞いましょう

あそこの新しく建てた家で病気の治療をしています。



私は行って彼を見舞いましょう。

朱三官、通事が見舞いにみえましたよ。



**ああ、ありがとうございます。わざわざおいでいただいて恐縮です。**



朱三官



横になったままで、起きないでいいですよ。  
1日何回食事ができますか。



**決まっていません。時には3回、時には2回です。**



普通のご飯を食べているのですか。それともおかゆですか。



**おかゆです。**



1回の食事にどのくらい食べられますか。



**時には2杯、1杯ちょっとだけの時もあります。**



あなたは心安らかにして静養しなくてははいけません。  
焦ってはだめです。では帰ります。

#### 《別の場面》



朱三官の病状は重いのですか。

はい。よくありません。







ああ、本当にかわいそうなことです。みなさんは、早く死亡の報告書を書いてください。私は上司に報告し、国王にその事を知らせます。そうすれば棺桶、死者に着せる衣服や納棺と埋葬のこと等を準備しやすいですから。



報告書は「私、**瞿張順**の船の船員朱三官は、昨年海上で漂流、多くの苦しみと困難を受け、更に驚きとおびえを受け、**結核**にかかりました。今年の3月喜界島にて数回吐血し、医者による治療も薬による治療も不可能でした。4月7日に運天港へ着き、そこの役人のおかげで医者にも見てもらい、薬も買うことができましたが、良くなりませんでした。今月17日に泊村に移り、泊村の役人の方は二人の医者に命じて彼の病気治療に当たらせてのみでなく、さらに治療と保養のため朝鮮人参すらも与えてくださいました。しかしながら病状があまりに重いために効果がなく、不幸にも7月7日酉の刻に病死しました。ここでお役人さまに重ねてお慈悲をいただき、国王様へのご報告をお願いいたします。また死骸をさらけ出すことなく適当な場所に葬ることができますよう、棺を賜り、あわせて埋葬の許可をいただきますようお願い申し上げます。あの世で安らかに魂を休息させたいと切望しております」

これでよろしいでしょうか？



私が上司にお届けします。上司が申すには、朱三棺の棺桶と埋葬の件については、すべて私たちが代わって準備するようにとのことでした。上司が、入棺と出棺はいつなのか尋ねるようにとのことでした。



明日一日で終われるでしょうか。

一日あればできると思います。



もしも間に合うなら、明日入棺と出棺をしましょう。天候がとても暑いですから、遺体を家の中に置いておくのはよくないでしょう。



では、上司に報告してきます。

\*このあとお通夜にやってきた琉球人の通訳見習いたちとの会話が続く・・・

## 資料4 イギリス軍艦水兵ウィリアム・ハリスの場合(1816年死去)

長い間、絶望的な状況にあった青年が、ここで亡くなった。その夜、<sup>ひつぎ</sup>棺は私たちの大工が作り、地元住民は上陸地点の近くの木の下にある小さな<sup>まいそう</sup>埋葬用の小山にイギリス式に墓を掘った。

翌朝、私たちが驚いたのは、主な住民の多くが<sup>もふく</sup>喪服を着て、<sup>そうぎ</sup>葬儀に出席するために待っていたことだ。マックスウェル艦長は、船団の水兵とともに上陸し、<sup>いたい あんち</sup>遺体の安置してある庭に向かった。水兵たちは<sup>ひつぎ</sup>棺の後ろに2人ずつ並び、次に<sup>ちゅうい</sup>中尉、上官、そして最後に艦長が並んだ。この行列の順番を注意深く見ていた住民たちは、順序が逆転していることを、何のヒントも与えられずに<sup>さつち</sup>察知し、行列が動き出すと、<sup>ひか</sup>控えめな態度で<sup>ひつぎ</sup>棺の前に並んで、しずしずと墓まで行進した。<sup>そうぎ</sup>葬儀が執り行われる間、大勢の人々がいたが、最大限の礼儀と<sup>せいじやく</sup>静寂が保たれた。

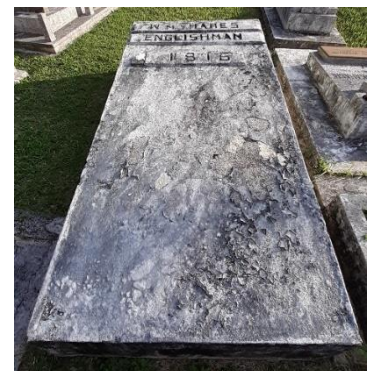
その翌日、島民は墓石を建てる許しを求めに来た。彼らは墓碑の石材の寸法などについて<sup>さしず あお</sup>指図を仰いだ。<sup>じゅうぐん</sup>従軍牧師テイラー師が墓碑の銘を考え、墨汁で英文が書かれたが、琉球人は簡単な適具を用いて、見事にこの英文の碑を彫りあげた。

“Here lies buried, Aged Twenty-One Years, William Hares, Seaman, of His Britannic Majesty’s Ship Alceste. Died Oct. 15, 1816 This Monument was erected. By the King and Inhabitants Of this most hospitable Island. ”

(イギリス軍艦アルセスト号の水兵ウィリアム・ハリスここに眠る。1816年10月15日没。享年21。この碑は、この島の極めて親切な国王および住民によって<sup>こんりゅう</sup>建立された)

この碑が出来上がって墓の上にはめ込まれると、島民らは、その上に供え物を供え、多量の酒を燃やし、琉球の僧侶によっておごそかな式が行われた。式の後の<sup>そな</sup>供え物は、<sup>せいげんじ</sup>聖現寺で<sup>りょうよう</sup>療養中の他の病人たちへ贈られた。

(バジル・ホール大佐「朝鮮西海岸及大琉球島探検航海記」〔1818年〕、軍医ジョン・マクロード「アルセスト号朝鮮・琉球航海記」〔1818年〕より)



資料5 康熙<sup>こうき</sup>23年（1684）8月の清国<sup>しんこく</sup>の礼部<sup>れいぶ</sup>（外務省にあたる）から琉球への通達

この度、これまでの民間の海上貿易禁止令（海禁<sup>かいきん</sup>）を解除したので、中国各省の多くの民間人が船を出し貿易するようになった。そこで、中国周辺の国々の国王は、それぞれ沿岸の地方官に命じて、もし中国船が漂着した際には、生存者をすみやかに保護して帰国させるようにせよ。



その後の清国と琉球の送還体制システムの基本となった

